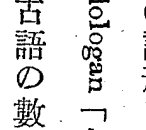
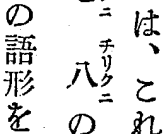
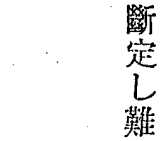
二中歴に見えたる蒙古語

金澤庄三郎

藤原通憲は唐僧の「我國より渡れるものか、此國より來りて學せるか」との問に對し、「本より我この國の素生なれども、もし遣唐使にや渡らむずらむとて、天竺震旦高麗新羅百濟を始とし、五六箇年の間に、上一人より下萬民の申しかへたる詞まで學びたるなり」と答へてゐる（平治物語）。また藤原佐世が寛平年間に勅を奉じて撰んだといふ日本國見在書目錄の小學家中には波斯國字樣一卷、突厥語一卷といふが見え、大江匡房の水言抄にも波斯國語の數詞が載つてゐる。其他かの明惠上人の天竺に渡らんとの宿願を慰めんとて、慶政上人が宋國の泉州から南蕃人に書かせて送つたといふ波斯文が今日まで傳へられてゐるといふから、平安朝時代にも外國語の研究は吾人の想像以上に旺盛なものであつたらしい。

二中歴は弘治三年權僧正實曉の奥書があるのみで、撰者の名を詳かにしないが、その中に引用してある掌中歴は三好爲康の著作だといふから、むげに後世のものとは思はれない。今その中の譯語歴を見るに、高麗語として、左の數詞が錄されてゐる。

一（カタナ）　二（ツフリ）　三（トキ）　四（サキ）　五（ユス）、　六（ハス）、　七（タリクニ）　八（チリクニ）　九（エタリ）　十（エツ）

右の中一（カタナ）二（フリ）は確に高麗時代の古語の俤を存してゐると考へられるのは、宋の孫穆が高麗國の語彙を集めたものに鷄林類事といふのがあつて、これは德川時代の學者でも新井白石・本居宣長、伴信友などには夙に知られてゐた書物であるが、それに據ると、一ヲ曰フ二河屯ト一（朝鮮音 ha-ton）、二ヲ曰フ二途孛ト一（朝鮮音 to-par）とあるから、二中歷の一二（カタナツフリ）はちやうどこれと一致してゐるのである。其他三（トキ）と四（サキ）、五（ユス）、と六（ハス）、九（エタリ）は、これを今日の朝鮮語數詞と較べて、錯簡があるやうに思はれるが、大體の比較はこれを試みるに困難でない。たゞ七（タリクニ）八（チリクニ）の二語だけは、朝鮮語數詞中に全然類似の語形を見出さぬのである。それで最初の中は傳寫の誤を重ねて、遂に原の語形を失つたものと考へてゐたところ、近頃漸くこれが蒙古語であることに氣附いた、卽ち七（タリクニ）は蒙古語  (dologan「七」の義)、八（チリクニ）は蒙古語  (jorgan「六」の義)から轉訛したものと思はれる。勿論、朝鮮語の數詞と蒙古語の數詞との間には、根本に若干の關係があつて、朝鮮語 yo tarp（八）は蒙古語  (dūrbon「四」の義）の倍數を示してゐるのであるから、二中歷所載の高麗語數詞中の蒙古語は、これを單なる攙入と見るべきか否か、容易に斷定し難いが、兎に角我國の古書中に蒙古語の記錄せられてゐることは、興味のあることと思ふ。

（昭和十二年十月七日稿）